

夏期留学プログラム参加者のフィラー使用と習得に関する一考察¹⁾

コーリヤ佐貫・葉子

アラスカ大学フェアバンクス校

瀨瀬憲子

ノートルダム大学

Abstract:

Along with the dramatic increase in numbers of students of Japanese in the early 1990s, proficiency levels also increased considerably. Consequently, many students now aim to attain a proficiency level high enough to communicate in work situations, which characterizes the functional aspect of the ACTFL Advanced-level proficiency rating. Unfortunately, fluency, another key attribute to the ACTFL-OPI Advanced level, has been considered difficult to teach in the classroom. For example, skills such as *aizuchi* and fillers play a significant role in facilitating smoothness in oral communication, yet few textbooks teach them. While more teaching materials in recent years have begun incorporating *aizuchi* in order to create more natural sample dialogues, students are rarely taught about fillers beyond "etto", nor are they given opportunities to practice varieties of them. Such inattention and the lack of practice have unfortunately lead to the myth that the only way to attain the ACTFL Advanced-level of fluency is to live in Japan. There is a definite need for materials and strategies to teach fillers. The present paper examines the acquisition of fillers by the participants of an eight-week summer study-abroad program and makes recommendations for classroom instruction based on the results.

1. はじめに

たとえ短期間ではあっても、日本への留学が、海外で日本語を学ぶ学習者に与える影響は非常に大きく、それぞれが「教室内では学習することのなかった何か」を必ず身に付けて帰国する。それは、日本語を話すことに慣れたなめらかな話し振りや自然な雰囲気、そして日本語が生活の一部となった自信でもある。帰国学生のこうした成長ぶりは、海外機関で教鞭をとる者にとっては感慨深いものでさえあり、そこから、「なめらかさ・流暢さは留学でしか身に付かない」という俗信さえ生まれることになる。

従来の日本語教育では初・中級レベルが中心であったため、口頭能力という対面式「会話」を考えがちであった。しかし、学習者のレベルが全体として向上し、上級以上の能力を目指す学習者が増加した現在では、筋道を立てて一人で長く話すことの出来る能力、即ち段落レベルで一人話（ひとりばなし）ができる能力を育成することが必須となってきている。この一人話を遂行する上で顕著になるのが先に

挙げた「なめらかさ・流暢さ」であり、特にフィラーの使用が重要になる²⁾。しかし、作られた固い調子の教科書会話のやりとりから一歩進み出て、よりなめらかな会話を目指して「あいづち」を教える教材は増加してきているが、フィラーを取り扱うものはまだ殆どない。³⁾

数の増加により即座に効果の出る「文法パターン」や「単語」等の学習項目と違い、「なめらかさ・流暢さ」の変化は、連続的な変化である。日本語をたくさん聞き、たくさん話す経験により徐々に身に付く技術である。そのため、日本で日本語を教える教師の場合はあまりにも当たり前にかかるこの変化に気づかないことも多いであろう。一方海外では、詰まったカリキュラムをこなすことに精いっぱい、そのような遅々とした進歩を見せる技能を教えることに匙を投げてしまっているとも言えよう。本稿では、「なめらかさ・流暢さ・自然さ」を決定する種々の項目のうちでも特にフィラーに注目し、日本での夏期集中日本語プログラム参加者のフィラー使用が、日本滞在及びホームステイの経験を通してのどのように変化したかを分析する。またその結果を考察することにより、教室指導への可能性を提言する。

2. ACTFL-OPIのレベル判定基準と流暢さ

非母語話者の外国語の口頭運用能力を計る全米外国語教育協会 (ACTFL, American Council on Teaching of Foreign Languages) による OPI (Oral Proficiency Interview) では、熟達度を、大まかに言って、機能・場面・正確さ・談話の型という4本柱に基づいた判定を総合し、初・中・上・超級という4つの主要レベルに分類する(鎌田 1990, 牧野 1991, 1995)。⁴⁾ 例えば流暢さは正確さの一側面として捉えられており、上級以上と認定される学習者には、総じて種々の言語能力の要素の中でも特にこの「なめらかさ・流暢さ」が、それより下のレベルの者には見られない顕著な特徴として現われるとされている。⁵⁾

さて正確さの一側面である流暢さの観点からすると、中級とは、話がたどたどしく、一人で話し続けるのは難しいというレベルである。例えば牧野 (1991) は、中級レベルの学習者の示すたどたどしさの要因の例として、以下の4点を挙げている (p. 24)。

- a) 文と文をスムーズに連結していく接続詞を使っていないか、下手に使っているため統括 (cohesion) のないパラタクティック (para-tactic) な羅列連文になってしまう

- b) 言語運用能力がないため、文と文の間に不自然なポーズが入ってしまう
- c) 語彙が見つからないため、ポーズがはいってしまう
- d) 発音があまりにも母語的でたどたどしく聞こえる（纏めの文）

一方、上級とは「時々つかえることがあっても、段落レベルで一人でどんどん話せ、外国人の日本語に慣れていない人にも容易にわかってもらえる」というレベルである。つまり、語彙や文法項目が増加し、またポーズが減少したからと言って、即上級に入れる訳では無い。例えば、接続詞を含む繋ぎ言葉が欠落している場合は、段落レベルの発話とは言えない。更に、フィラーやよどみ言葉が無い場合、文の整然とした羅列は非常に不自然な印象がする。これらは、従来の教室活動が作られた会話やスピーチを中心にしてきたことによる、無駄な言葉の無い会話や書かれたスピーチの暗記練習及び段落レベルの一人話練習の欠落が影響していると言えよう。一方、日本への留学生達は「自然な」発話に触れることにより、このような技術を「自然に」身に付けるようである。これが、「日本滞在経験無しに ACTFL-OPI の上級に入るのは難しい」と言われる所以であろう。本稿では、特にフィラーの使用と習得について分析を行い、教室指導への可能性を考察する。

3. データ収集及び分析の方法

3.1 被験者

本稿では、1997年度北海道国際交流センター（以下 HIF）夏期日本語・日本文化講座参加者総数 65 名の中から、ボランティアとして協力してくれた 6 名の学生（男性 2 名、女性 4 名）のデータを分析する。⁶⁾ 該当講座は 6 月から 8 月にかけての 8 週間開講され、プログラムの方針で参加者全員が全期間中ホームステイをした。

被験者全員に関する主な情報は表 1 に仮名で纏めてある。国籍はアメリカ 5 名、台湾 1 名であったが、全員がアメリカの大学に在籍中（学部生 4 名・大学院生 1 名）または進学予定（1 名）であった。日本語学習歴は、全員が大学レベルで 2～3 年勉強したのに加え、高校や夏期講座等、種々の学習歴があった。同様に、全員が以前に何らかの形で滞日経験があったが、その長さや理由も多岐に渡っている。まず家庭の事情による長期日本在住が 2 名（ショーン、フィー）あったが、いずれもアメリカンスクールに通い、日常的にはほとんど日本語を使用しなかったと話している。高校の交換プログラム参加者は 3 名（ブレンダ、リック、リリー）で、ホ

ームステイも経験している。過去の HIF 参加者も 1 名（フィー）あった。単なる短期の観光旅行だけというのはルーシーのみであった。

HIF では開講時に OPI に基づいた独自の口頭試験を実施し、クラス分けの基準の 1 つとしている。この口頭試験は、夏期講座の講師陣が 2 人 1 組となって、ACTFL-OPI の基準に基づいて交代で質問をする、約 10 分間程度の対面式インタビューである。結果は表 1 にあるように、中級上 1 名（リリー）、中級中 2 名（ルーシー、フィー）、中級下 2 名（リック、ショーン）、初級上 1 名（ブレンダ）であった。但し、インタビューを行った講師陣は必ずしも、ACTFL-OPI のテスター有資格者ではなく、またインタビューの時間もかなり短縮されているので、この判定はあくまでも参考である。また 97 年度の HIF では、中級 I-1/I-2・中級 II-1/II-2・上級 1・上級 2 の合計 6 コースが開講されたが、被験者のクラス分けの結果は、中級 II-1 が 1 名（ブレンダ）、中級 II-2 が 2 名（リック、ショーン）、上級 2 が 3 名（ルーシー、フィー、リリー）であった。

表 1：被験者データと口頭能力レベル（開講時）

仮名	性別	国籍	学年	日本語学習歴	滞日歴	OPI レベル	HIF コース
ブレンダ	女	米国	大学 3 年 終了	1 年（米国高校） 10 ヶ月（高校留学） 2 年（米国大学）	10 ヶ月（高校留学・ ホームステイ）	初ー上	中級 II-1
リック	男	米国	大学 2 年 終了	2 年（米国高校） 2 年（米国大学）	3 週間（高校夏期交 換プログラム・ ホームステイ）	中ー下	中級 II-2
ショーン	男	米国	大学 2 年 終了	3 年（高校・アメ リカンスクール） 2 年（米国大学）	3 年（高校・家庭の 事情）	中ー下	中級 II-2
ルーシー	女	台湾	大学院生	2 年（米国大学）	数週間（旅行）	中ー中	上級 2
フィー	女	米国	大学 3 年 終了	3 年（3～6 歳・ア メリカンスクール） 2 年（米国大学） 2 ヶ月（95 年度 HIF 夏期講座）	4 年（1980～1984 年 ・家庭の事情） 2 ヶ月（夏期講座・ ホームステイ）	中ー中	上級 2
リリー	女	米国	高校卒業 米国大学 入学予定	2 ヶ月（高校留学） 2 年（米国高校在学中 下記大学コース受講） 95 年：米国大学 1 年 95 年夏：米国大学 2 年 96 年夏：米国大学 3 年	2 ヶ月（高校夏期留 学・ホームステイ） 2 ヶ月（旅行）	中ー上	上級 2

3.2 データ収集

フィルターを含む日本語口頭能力全般の習得過程を観察することを目的として、表2にあるように、プログラム第2週から第7週までの延べ6週間、週1回、5分程度の小インタビューを行った。インタビューは、被験者との合意の基に全てテープに録音し、インタビュー終了後文字化した。本稿では、この内、初回（第2週目）と最終回（第7週目）のインタビューのデータを分析する。

表2：夏期講座スケジュールと小インタビュー実施日

第0週：	6月19日	プレースメントテスト（筆記・口頭）
第0週：	6月21日	開講式
第1週：	6月23日	クラス開始
第2週：	7月3～4日	第1回小インタビュー
第3週：	7月10～11日	第2回小インタビュー
第4週：	7月17日	期末試験
第4週：	7月18～21日	中休み
第5週：	7月22日	第3回小インタビュー
第6週：	7月28～29日	第4回小インタビュー
第7週：	8月7～8日	第5回小インタビュー
第8週：	8月14日	期末試験
第8週：	8月16日	閉講式

小インタビューはレベル判定が目的ではないため、OPIの基本となるレベル・チェックのためのタスクを省き、「導入 → 一人話（一週間の思い出） → ロールプレー → 終結」という5分程度の簡単なものを行なった。小インタビューのトピックは、トピックによる各自の得手不得手のばらつきを防ぎ、各回及び学生間の比較を可能とするために、あえて「今週印象に残ったこと」という同じトピックを用いた。毎週同じトピックで一人話をさせる場合、被験者が前もって練習することが可能になるため、自然 (spontaneous) な発話ではなくなるという危険性が指摘される。しかし本研究の被験者は全てボランティアであり、本インタビューの出来不出来はコースの成績に全く関係しないことから、現実問題として、データに影響が出るほど事前準備をした学生がいたとは考えにくい。本稿では上記の小インタビューの初回と最終回の結果を考察するが、特にフィルターの使用に焦点を当てるため、フィルター使用が重要となる一人話の部分のみについて分析を行い、ロールプレーの部分は考慮しなかった。

3.3 発話単位の定義

フィルター使用を量的に比べる場合、個人によって話のスピード、即ち話す分量が異なるため、比較が難しい。そこで本稿では、ある決められた時間内に何語話したか、またあるフィルターが何語中に何回使われたかというように比較することにする。しかし「語」という単位は日本語では確立しておらず、また話し言葉のデータの場合は特に定義がしにくい。そこで本稿では、日本語学習者の上達が見やすい単位と言う観点から、「発話単位」という基準を設けた。以下の (1) は、被験者の発話を「発話単位」に分けた例である。

(1) 発話単位分割例

(1a) それで／アー／リンジーさん／は／私／も／友達／だ／から、／とても
／アー／たのし、楽しかった／と／思います。

(1b) あのー／あの／次／の／日／に／あのー／学校／の／まだ／行け／なけ
れば／なりません／でした。／だから／その／月曜日／に／私／は／日
直／を／あ、あげ／なければ／なりません／でした／から。

本稿における発話単位の基本は、発話を「ね」の挿入が可能な場所で区切ったものである。しかし、「リンジーさんは」や「私も」のように「自立語+付属語」からなる場合には、非母語話者の助詞の非使用の間違いが数値に現れるよう、助詞を独立した最小単位とした。これは、本稿では学習者の発達段階の言語を扱っているため、「ハンバーガー／好き」と「ハンバーガー／が／好き／です」と言う発話では、後者の方が上のレベルであることを示していると考えからである。この違いが数値として現れるよう、前者は2発話単位、後者は4発話単位として扱う。また、話し言葉には繰り返しや言い直し等、書き言葉には無い現象があるため、それらについても特別に扱った。以下に定義の要点を纏める。

- (1) 名詞は、1単位とした。しかし普通名詞として分解可能なものは分割して各1単位とし数えた。例えば、助詞で繋がれている「女／の／子」は、助詞の前後で切って3単位とした。しかし、「青森駅」「リンジーさん」等、一塊の固有名詞と考えられるものは分割せずに各1単位とした。

- (2) 「です」「います」は切り離し1単位とした。但し、「たたいた／んです」等、「んです」の使用は、一塊として1単位とした。
- (3) 動詞は、ます・過去形を動詞の一部と考えて、全体を1単位とした。但し、「帰って／きました」等の複合動詞は、分割して2単位とした。同様に、「食べ・始めました」「持って・行きました」等も2単位と考えられるわけであるが、実際の発話にはこのような例は無かった。また、「遊び／に／いく」は3単位である。
- (4) 副詞は活用部分を含めを1単位とした。例えば「一緒に」「本当に」等は、各々1単位とした。
- (5) 助詞は、(4)の副詞句の場合を除き全て切り離し1単位とした。例えば、「見物／を／し／に／行く／人」や「すき／に／なりました」等に使われている「を」「に」は各々1単位とした。但し、「週末／には」の「には」等の複合助詞は切らずに1単位とした。
- (6) な形容詞は、連体形と考え、「きれいな」を1単位とした。しかし、「上手／だ」「上手／では／ない」「きれい／だ／と／おもいました」「すき／に／なりました」のように、活用する場合は、語幹を1単位とした。
- (7) い形容詞は、「いい／本」「いい／です」のように語幹を1単位とした。また、「面白く／ない」等の否定形は2単位として数えた。但し、「つまらない」のように対応する肯定系が存在しない場合は、分割せずにそのままで1単位とした。
- (8) 接続詞・指示詞は全て1単位とした。
- (9) 「あー、あの一、あー」といったフィラーは1単位とした。「あ、あ、あー」「あ、あの一」「あーあーあー」「あーん、んー」など誤フィラーが連続しているものは、たくさん言ったからと言って、スピードや文法能力が向上してるわけでもなく、実質意味がないので、分割せずにそのままで1単位とした。
- (10) 同様に反復や言い直しの部分は、一纏めにして1単位とした。例えば、「きょう、こ、きよ／去年」の最初の言い直しの部分は全部で1単位である。

実際のデータを以上のような「発話単位」の分割方法に基づいて分割したものの中から、問題になりやすい部分を取り上げ、表3に纏めた。()内の例は、実

際のインタビューからとったものではないことを示す。

表 3 : 発話単位分割方法例

タイプ	例			
名詞	学生	女／の／子	牛／の／形	
	アメリカ／の／運動会			
	子供／の／イベント／も／あった	プログラム／人たち／と／いっしょ		
固有名詞	青森駅	リンジーさん	イタリアンレストラン	
です・だ	学生／です	小さい／です	いい／です	(しろかった／です)
	大変／です	(きれい／だった)	きれい／だ／と／おもい／ました	
	見たい／です	たたいた／んです	あげ／なければ／なりません／でした	
いる・ある	い、妹／は／2人／います		書いて／あります	
助詞	留学生／は	私／の／成績／も	男／の／人／みんな／で	
	週末／には	Tシャツ／が／ある／か／どう／か／わからない／から		
動詞	分かりません	行きました	楽しかった	帰って／きました
	遊び／に／いく		見物／を／し／に／行く／人	
	がんばら／なければ／なりません			
い形容詞	つまらない	面白く／ない	ちょっと／いい／経験／と／思います	
	楽しかった	高い／じゃ／ない	(しろく／なかった／です)	
な形容詞	上手／な／人	上手／では／ない	あまり／上手／じゃ／ない	
	好き／に／なりました		真面目／じゃ／ない	
副詞	たぶん	たくさん	一緒に	本当に
	だんだん／、まだ	遅く／帰りました	すごい／こんで／いました	
接続詞	それに	つまらなかった／けれど		
	でも	スピーチ／を／あげ／なければ／なりません／でした／から		
指示詞	その／時	それ		
反復・ 言い直し	ね、ねぶたまつり	こ、こども／が		
	しょう、しょうがつ／の		きょう、こ、きょ／去年	
フィラー	あ、あの一	あーあーあー	あーん、んー	アー／できました
	あー、あの一、あー／でも	ア、ア、あの一／たぶん		
	あの一／文法／の／試験		あー、あの一、あー	
	(あ／その／本／が／あー／それで)		んー、んー／踊り／とか	
間投詞・ 外国語	Oh			

4. 発話スピードとポーズ

4.1 発話スピードの推移

表4に、発話時間と発話単位数の推移を纏めた。発話時間については、2名がやや減少、残り4名のうち2名は2倍以上に増加している。しかし時間制限等の都合から、必ずしも被験者に話したいだけ話させていたとは言えないので、発話時間の長さをそのまま考察することはあまり意味が無い。それよりも、ここでは1分間における発話単位数を計算し、発話スピードの変化を見ることにする。

表の被験者は、上から下へ、第1回目のスピードの速い順に並べてある。ホームステイ経験のある4人（リリー・フィー・ブレンダ・リック）が上位に上がり、残りの二人を引き離していた。過去の滞日経験による実地の発話練習の効果が出ていると言っているのではないだろうか。また、第5回目において、全く変化のなかったブレンダを除く全員について、1分間における発話単位数は約6-16単位増加し、5週間の間に、ほぼ全員の発話スピードが速くなってきていることがわかる。尚、発話スピードは際限なく速くなるものではないので、もともとの発話スピードが他の被験者に比べずば抜けて速かったリリーとフィーの伸び率は、他の被験者に比べて低い。逆に、もともとの発話スピードが他の者に比べかなり遅かったショーンとルーシーの伸び率が最も高かった。

表4：発話スピード

名前		発話時間	総発話単位数	発話単位数/分	発話単位数の変化
リリー 中-上	第1回	2分40秒	227	85.1/分	+5.9/分
	第5回	6分4秒	552	91.0/分	
フィー 中-中	第1回	3分25秒	257	75.2/分	+9.0/分
	第5回	4分50秒	407	84.2/分	
ブレンダ 初-上	第1回	4分38秒	309	66.7/分	0/分
	第5回	9分55秒	661	66.7/分	
リック 中-下	第1回	3分0秒	197	65.7/分	+11.4/分
	第5回	3分20秒	257	77.1/分	
ショーン 中-下	第1回	3分5秒	181	58.7/分	+15.8/分
	第5回	2分37秒	195	74.5/分	
ルーシー 中-中	第1回	5分00秒	284	56.8/分	+15.5/分
	第5回	3分40秒	265	72.3/分	
平均	第1回	3分38秒	242.5	68.0/分	+9.6/分
	第5回	5分4秒	389.5	77.6/分	

さて、発話スピードに全く変化が見られなかったブレンダであるが、これは口頭能力の「化石化」の現れだと推測される。ブレンダは過去に長期の留学・ホームステイ経験があり、第1回の時点では、発話スピードは速い方であった。しかし、第5回の時点では、最下位に落ちている。以下に、ブレンダの第1回及び第5回インタビューの冒頭部を挙げる。

(2a) ブレンダ第1回冒頭部

うんーっと、たくさんねー。あーん、あ、最初の時日本へ、あ、来ました。函館の山、あ、行った、とー、名前ちよとわからない、でも、山の、あー、へん、山へん、やさいと、あー、お母さんと一緒に、あーん、あーん、見ました。あーと、あんー、友達に、あー、函館の町に行きました。あー函館りゅうこくに、をビールを飲みました。とー、あーいろいろ、あー、あー、教えて、クラスは教えてたくさん勉強しました。あーんー、でもー、一番はホストファミリー一緒にホストファミリーと一緒に、話す、あん、話しました。一番好きでしょう。とってもよかった。

(2b) ブレンダ第5回冒頭部

んー、もちろんあの一、最初に金曜日、ブレットさんはペリーさんに、あー、パレードとお祭りをやりました。とてもとてもおもしろかった。だから、いろいろ服、あー、を見ました。あの一、アメリカ、昔のアメリカと日本の服、あー、があります。だから、とてもおもしろかった。あの一お、とー、すごいいろいろおもい、おもりが、おもりをしました。あの一、でも、子供とおばあちゃん、一緒におもりをします、あーしました。とても、あー、いい経験、見たときはあの一、土曜日はあの一、赤ふんのお祭りをします、しました。すごーい、すごい経験です、日本の文化経験、でもいろいろ、あんー、いろいろ、あん、あの一、(pause)となに、じん、じん、じんじゃ、わかりません、いろいろ、ちょっと待って、あの一、みんな留学生、あーと、わたし一緒に、あー、お祭りをしました。

上記の例及び以下の他の分野での分析にも現れているように、ブレンダの日本語はこの夏期講座の間に総じて成長を見せなかった。これは、ブレンダが高校時代に

留学した際にいわゆるブロークンな日本語を身に付けてしまい、それが化石化してしまっていることを示していると思われる。牧野 (1996) は「例えば、高校生などがいきなりホームステイをして、日本の中学や高校に一年ぐらい通うと、いわゆる *abominable fluency* という、正確さのひどく欠けた、恐るべき流暢さを持って帰ってくることもある。」(p. 61) ことを指摘しているが、ブレンダはこの典型的な例であると言えよう。

4.2 ポーズの推移

ACTFL-OPI の中級レベルとは、高頻度構文のコントロールがまだ部分的にしかできないレベルである。そこで、適当な語彙や構文を頭の中で思い出しながら発話することになるため、前節に述べた牧野 (1991) の指摘にあるよう、中級レベルの学習者の発話には不自然なポーズが多々入りたどどしく聞こえる。しかし、上級レベルに近づくに従って、そのようなポーズは減少する。本稿では、ポーズを短（3秒未満）と長（3秒以上）に分け、その回数を表5に纏めた。但しその際、各回及び各被験者間の比較を可能にするために、200 発話単位におけるポーズの回数に換算した。

表5：ポーズの長さと同数

		200 発話単位におけるポーズの回数						
	長さ	ブレンダ 初-上	ショーン 中-下	リック 中-下	ルーシー 中-中	フィー 中-中	リリー 中-上	平均 (%)
第1回	3秒未満	6.5	7.7	6.0	17.5	4.7	2.6	7.5(85.2%)
	3秒以上	0.7	2.2	0	4.9	0	0	1.3(14.8%)
	合計	7.2	9.9	6.0	22.4	4.7	2.6	8.8(100%)
第5回	3秒未満	4.8	5.1	2.3	9.0	2.9	1.1	4.2(93.3%)
	3秒以上	0.9	0	0	0.8	0	0	0.3(6.7%)
	合計	5.7	5.1	2.3	9.8	2.9	1.1	4.5(100%)
変化	3秒未満	-1.7	-2.6	-3.7	-8.5	-1.8	-1.5	-3.3
	3秒以上	+0.2	-2.2	0	-4.1	0	0	-1.0
	合計	-1.5	-4.8	-3.7	-12.6	-1.8	-1.5	-2.2

表5から明らかなように、本稿の被験者は、3秒以上の不自然に長いポーズを使うことは少なく、他の被験者に比べて発話スピードがずば抜けて速かったリリーとフィーの2人は、第1回目の時点から長いポーズは皆無であった。また第5回にお

いては全員の長いポーズの回数が1桁以下になっている。全般的に言って、レベルが上になるほどポーズの長さや回数が減少する傾向にあると言えよう。

留学経験が無く、学習期間が一番短いルーシーは、第1回目では他のものより飛び抜けて長短両方のポーズが多かったが、第5回目ではかなりの減少を見せた。ルーシーは被験者中唯一の大学院生でかつ唯一の東洋系でもある。他の者より静かに、ゆっくりと考えて話す傾向にあることがポーズが全体として多いことに影響しているのではないかと思われる。またショーンとリックのポーズも減少している。

一方唯一の例外は前節で化石化を指摘したブレンダで、3秒以上のポーズは極く僅かではあるが第5回目には却って増加している。また回数としても、第1回目では少ない方であったものが、第5回目には一番多くなっており、これも化石化の一端と言えよう。

5. フィラー

5.1 フィラー使用頻度の推移

表6にフィラーの使用頻度を纏めた。まずフィラーの総頻度であるが、全員が約3～6発話単位に1回、何らかのフィラーを使用していることがわかる。しかし日本語母語話者のフィラー頻度が発話全体の約10%程度だとすると、フィラーの使用は約10発話単位に1回程度に抑えられなければならない。⁷⁾以下に、発話例としてリリーの第1回インタビューの冒頭部分を挙げる。フィラーは下線で示した。

(3) リリー第1回インタビュー冒頭部

はい。あのー、週末にはホストファミリーと、あの、恵山を見に行きました。恵山はあのー、あ、か、かず、かじの山です。あの、森はあまり、あ、あの、恵山の上、あ、部分には森、あまりないで、あの、ぼ、bald 山というところ
です。それから、よくあのけん、見物を、あの、あ、見物をしに行く人も、あ、あ、いました。とてもおもしろ、面白い経験でした。んー、それから、あの、車に乗ったとき、あのー、あー、おねえちゃんと私、英語とあー、日本語の歌を歌いました。

次節で詳しく述べるよう、リリーは他の被験者に比べ、正フィラーの割合がずば抜けて高い。上記の例を見てもわかるように、「あのー」「あの」が大半を占め、

個々のフィラーとして考えた場合、間違いと言えるものは少ない。しかし発話全体としてフィラーがかなり頻繁に使用されており、これがたどたどしさや聞きづらさの要因となっている。また後述するよう、ア系のフィラーが殆どであることも、聞きづらさに拍車をかけていると考えられる。これらの傾向は他の被験者についても同様で、質と量の両面で、より自然なフィラーの使用を促すことが必須である。具体的には、フィラーの総頻度を減少させること、特にア系フィラーを減少させ、より適切なフィラーの使用に努めることが被験者全員に該当する学習目標と言えよう。

表6から分かるように、総フィラー使用頻度は第1回から第5回にかけて全員に関して減少（即ち、表6では+値変化）しており、望ましい傾向にあると言える。しかし、第1回平均が約3.8発話単位に1回、第5回の平均は約4.9発話単位に1回で、平均で1.1単位の減少のみで、あまり大きな変化とは言えない。フィラー使用に関して、学習者の意識を高める必要がある。

次に、表6では総フィラー使用頻度に加え、各フィラーの使用を正誤に分け、その頻度も記した。正誤の判定については、次節で詳しく述べるので、ここでは頻度の変化を見るに留める。誤フィラーの頻度については、全員減少（即ち、表6では+値変化）しており、これも良い傾向にあると言えるが、その変化についてはかなりの個人差が見られる。特にリックとブレンダについては、減少率が他の被験者に比べてかなり低く、化石化の傾向にあると言えよう。

正フィラーの使用については、増加と減少のどちらが良いかということは一概には言えない。例えば、もともと正フィラーの率が高かったリリーの場合などは、正フィラーも含めて、頻度の減少が望ましい。一方、正フィラーの率が低い、他の被験者の場合は、誤フィラー頻度を大幅に減らし、正フィラー頻度を増やすことが望ましい。リックに関しては、正フィラーの頻度が他の被験者に比べ極端に少なく、第1回と第5回で進歩を見せなかった。先に述べたよう、誤フィラーの減少もあまり見られず、フィラーの化石化の傾向が見られる。注意を促すことが必要であろう。

表6：発話単位数に対するフィラーのタイプと頻度

名前		総フィラー頻度 (+値が望ましい)	誤フィラー頻度 (+値が望ましい)	正フィラー頻度
リリー 中-上	第1回 第5回 変化	4.1 単位に1回 4.5 単位に1回 +0.4 単位に1回	15.1 単位に1回 21.2 単位に1回 +6.1 単位に1回	5.5 単位に1回 5.8 単位に1回 +0.3 単位に1回
フィー 中-中	第1回 第5回 変化	4.9 単位に1回 6.7 単位に1回 +1.8 単位に1回	9.9 単位に1回 12.3 単位に1回 +2.4 単位に1回	9.9 単位に1回 14.5 単位に1回 +4.6 単位に1回
ルーシー 中-中	第1回 第5回 変化	4.3 単位に1回 5.9 単位に1回 +1.6 単位に1回	4.7 単位に1回 10.2 単位に1回 +5.5 単位に1回	47.3 単位に1回 13.9 単位に1回 -33.4 単位に1回
リック 中-下	第1回 第5回 変化	3.5 単位に1回 4.7 単位に1回 +1.2 単位に1回	3.9 単位に1回 5.2 単位に1回 +1.3 単位に1回	39.4 単位に1回 42.8 単位に1回 +3.4 単位に1回
ショーン 中-下	第1回 第5回 変化	3.2 単位に1回 4.3 単位に1回 1.1 単位に1回	3.6 単位に1回 13 単位に1回 +9.4 単位に1回	30.2 単位に1回 6.5 単位に1回 -23.7 単位に1回
ブレンダ 初-上	第1回 第5回 変化	3.0 単位に1回 3.4 単位に1回 +0.4 単位に1回	3.4 単位に1回 4.5 単位に1回 +1.1 単位に1回	28.1 単位に1回 14.4 単位に1回 -13.7 単位に1回
平均	第1回 第5回 変化	3.8 単位に1回 4.9 単位に1回 +1.1 単位に1回	6.8 単位に1回 11.1 単位に1回 +4.3 単位に1回	26.7 単位に1回 16.3 単位に1回 -10.4 単位に1回

5.2 誤フィラーのタイプと頻度の推移

教室内では、単語を増やしたり文章の読みを練習することはあっても、フィラーの種類、意味、使い方等、フィラーそのものについて学習したりすることはもとより、フィラーの発音練習をすることは殆ど無いと言ってよいであろう。そのため、フィラーの種類や発音に関する学習者の意識はかなり低いと推察される。前節では誤フィラーの減少が望ましい傾向であることを指摘したが、本節では特に誤フィラーのタイプについて考察することにより、指導の方針を決める助けとしたい。誤フィラーは表7にあるように、母語彙フィラー、母語発音フィラー、誤語彙フィラーの3つのタイプに分類した。

表7：誤フィルターのタイプ

	タイプ	例		
正フィルター		あの一	あの	えーっと
誤フィルター	母語彙フィルター	Oh	(well)	(Let's see)
	母語発音フィルター	ア	アー	んー
		あーん	ちよと	
		あーの一 (極端に尻上がり発音のもの)		
	誤語彙フィルター	たぶん	すごい	ちよっと
	接続詞 (間違った使い方)			

表7のタイプ分けに基づき、表8に、正・誤フィルターのタイプの頻度と割合を纏めた。誤フィルターの原因は殆どが母語発音フィルターにあることが分かる。第1回でほんの僅かにあった母語彙フィルターは、第5回では皆無になり、誤語彙フィルターも、ショーンとブレンダを除く全員が皆無になっている。以下は、ブレンダの第5回インタビューからの例である。

(4) ブレンダ第5回インタビュー発話例

あー、朝の10時。青森に行きました。あーん、マクドナルドに行きました。すごい、みんな、す、とても嬉しい。でもほんと高いじゃない、私はちよとびっくりした、と思います。でも私は、あー、でも、マクドナルドのあー、食べ物ちよとちがう。アメリカ、アメリカで、あーんたくさんケチャップあげました。日本ケチャップとフレンチフライズ一緒に食べました、ちよとへんと思います。でもあーの一、デザートもちよとおかしい、あーんと思います。ちよと違う、おかしいじゃない、でも違う。

このように、誤語彙フィルターが増加しているショーンとブレンダについては、化石化の傾向が疑われる。

表8：誤フィルターのタイプと頻度

フィルタータイプ		正	母語彙	母語発音	誤語彙	合計
リリー 中-上	第1回	41(73.2%)	0	15(26.8%)	0	56 (100%)
	第5回	96(78.7%)	0	26(21.3%)	0	122 (100%)
	変化	+5.5%	0	-5.5%	0	
フィー 中-中	第1回	26(50%)	0	25(48.1%)	1(1.9%)	52 (100%)
	第5回	28(45.9%)	0	33(54.1%)	0	61 (100%)
	変化	-4.1%	0	+6.0%	-1.9%	
ルーシー 中-中	第1回	6(9.1%)	1(1.5%)	59(89.4%)	0	66 (100%)
	第5回	19(42.2%)	0	26(57.8%)	0	45 (100%)
	変化	+33.1%	-1.5%	-31.6%	0	
リック 中-下	第1回	5(8.9%)	0	46(82.2%)	5(8.9%)	56 (100%)
	第5回	6(10.9%)	0	49(89.1%)	0	55 (100%)
	変化	+2.0%	0	+6.9%	-8.9%	
ショーン 中-下	第1回	6(10.7%)	0	47(83.9%)	3(5.4%)	56 (100%)
	第5回	30(66.7%)	0	9(20%)	6(13.3%)	45 (100%)
	変化	+56.0%	0	-63.9%	+7.9%	
ブレンダ 初-上	第1回	11(10.9%)	5(5.0%)	60(59.4%)	25(24.7%)	101 (100%)
	第5回	46(24.0%)	0	96(50%)	50(26%)	192 (100%)
	変化	+13.1%	-5.0%	-9.4%	+1.3%	
平均	第1回	27.1%	1.1%	65.0%	6.8%	100%
	第5回	44.7%	0%	48.7%	6.6%	100%
	変化	+17.6%	-1.1%	-16.3%	-0.2%	

5.3 母語がフィルタータイプに与える影響

中級レベル話者が単語や文型を思い出そうとする場合、初級レベル者のように単に沈黙するというよりも、質問に答えたり発話を継続する意志があることを会話相手に伝えて、自分のターンを維持しようとする傾向が強くなる。しかし日本語のフィルターを使用する能力がまだ無いため、母語のフィルターを借用する例（例えば、英語の「uh」等）が非常に多くなる。そのため、「たどたどしい」というよりも「耳障り」という表現の方がピッタリする場合が多々ある。本節では、母語がフィルタータイプに与える影響について考察する。そのために、まず表9にあるように、フィルターを音韻と機能によって分類し、使用され易いタイプとされにくいタイプを明らかにする。

表9：フィラーのタイプと頻度

タイプ	例
ア系	ア、アー、アーン、アン、アン、あーんっと、あの一、あの一、あの
ン系	ん、ん、んーとね、うんーっと
エ系	え、えーっと
ソ系	そ、そう、その
マ系	まあ
何系	なに、なんとか、それなに、なんだっけ
応答系	うん、はい、いえ
母語彙系	Oh
副詞系	すごい、たぶん、ちょっと、いろいろ
命令系	ちょっとまって
謝り系	すみません
接続詞系	でも、あと一、と一、それで、だから、そのうえ、それに
反復系	せ、せんしゅう／はし、はしる／

さて、各被験者のフィラーを上での区分にしたがって分類したものが表 10 である。まず顕著なのは、ア系フィラーの多用とエ系及びマ系フィラーの非用であろう。英語母語話者が多いため、英語の「uh」というフィラーの借用が多く、ア系のフィラーが、1 回目と 2 回目の双方においてほぼ 6 割を占めている。しかし単に英語フィラーの「アー」のすり替えとして「あの」や「あの一」を使用した場合、「あの」は「あの、ちょっとすみませんが」等、「聞き手へ何かを依頼したり誘ったりするとき」によく用いられるため、聞き手に「何か言いにくいことを言いたいのかな」或いは「何か頼みたいのかな」と間違った予測をさせてしまったりする。この傾向は特に「あの一」の場合に顕著であり、「あの」が使われた場合には問題が少ない。これは、母音の長さが違うだけの同じ「ア」系のフィラーではあるものの、「あの一」には「話し手が聞き手に会話への注目および参加を促す機能 (attention getter)」が強く、「あの」には「話し手が発話のリズムを整える為に必要な時間を生み出す機能」、つまり純粋な「穴埋め、時間稼ぎの機能」が強いからではないかと思われる。⁸⁾ 母音の長さの違いの習得は日本語非母語話者の多くが不得手とする領域なので、指導にあたって特に注意する必要がある。また、牧野 (私信) が指摘するよう、独り言で「あの」をいうことは無いため、「一人話」の際の「あの」の使用にも注意が必要である。ア系フィラーの誤使用と多使用を改善する指導が望まれる。

表 10 : フィラー (正誤総計) の種類の変化

タイプ		ブレンダ 初-上	ショーン 中-下	リック 中-下	フィー 中-中	リリー 中-上	ルーシー 中-中	総数
ア	第1回	52(51.5%)	43(76.8%)	42(75.0%)	38(73.1%)	37(66.1%)	14(21.2%)	226(58.4%)
	第5回	88(45.8%)	32(71.1%)	48(87.3%)	43(70.5%)	76(62.3%)	2(4.4%)	289(55.6%)
	変化	-5.7%	-5.7%	+12.3%	-2.6%	-3.8%	-16.8%	-2.8%
ン	第1回	4(4.0%)	3(5.4%)	5(8.9%)	5(9.6%)	7(12.5%)	27(40.9%)	51(13.1%)
	第5回	4(2.1%)	0	1(1.8%)	1(1.6%)	12(9.8%)	7(15.6%)	25(4.8%)
	変化	-1.9%	-5.4%	-7.1%	-8.0%	-2.7%	-25.3%	-8.3%
エ	第1回	0	0	3(5.4%)	0	0	0	3(0.7%)
	第5回	1(0.5%)	0	1(1.8%)	0	0	0	2(0.4%)
	変化	+0.5%	0%	-3.6%	0%	0%	0%	-0.3%
ソ	第1回	0	1(1.8%)	0	0	0	3(4.6%)	4(1.0%)
	第5回	0	0	0	0	0	2(4.4%)	2(0.4%)
	変化	0%	-1.8%	0%	0%	0%	-0.2%	-0.6%
マ	第1回	0	0	0	0	1(1.8%)	0	1(0.3%)
	第5回	0	1(2.2%)	0	0	0	0	1(0.2%)
	変化	0%	+2.2%	0%	0%	-1.8%	0%	-0.1%
何	第1回	1(1.0%)	0	0	0	0	0	1(0.3%)
	第5回	2(1.0%)	0	0	0	6(4.9%)	4(8.9%)	12(2.3%)
	変化	0%	0%	0%	0%	+4.9%	+8.9%	-0.1%
応答	第1回	0	1(1.8%)	2(3.5%)	1(1.9%)	0	2(3.0%)	6(1.5%)
	第5回	0	1(2.2%)	0	1(1.6%)	0	2(4.4%)	4(0.8%)
	変化	0%	+0.4%	-3.5%	-0.3%	0%	+1.4%	-0.7%
母語彙	第1回	1(1.0%)	0	0	0	0	0	1(0.3%)
	第5回	0	0	0	0	0	0	0
	変化	-1.0%	0%	0%	0%	0%	0%	-0.3%
副詞	第1回	2(2.0%)	0	0	0	0	0	2(0.5%)
	第5回	25(13.0%)	2(4.5%)	0	0	0	1(2.2%)	28(5.4%)
	変化	+11.0%	+4.5%	0%	0%	0%	+2.2%	+4.9%
命令	第1回	13(12.9%)	0	0	0	0	0	13(3.4%)
	第5回	12(6.3%)	0	0	0	0	0	12(2.3%)
	変化	-6.6%	0%	0%	0%	0%	0%	-1.1%
謝り	第1回	0	0	0	3(5.8%)	0	0	3(0.8%)
	第5回	0	0	0	0	1(0.8%)	0	1(0.2%)
	変化	0%	0%	0%	-5.8%	+0.8%	0%	-0.6%
接続詞	第1回	24(23.7%)	4(7.1%)	3(5.4%)	1(1.9%)	8(14.3%)	4(6.1%)	44(11.4%)
	第5回	52(27.1%)	4(8.9%)	1(1.8%)	6(9.9%)	3(2.5%)	8(17.8%)	74(14.2%)
	変化	+3.4%	+1.8%	-3.6%	+8.0%	-11.8%	+11.7%	+2.8%
反復	第1回	4(3.9%)	4(7.1%)	1(1.8%)	4(7.7%)	3(5.3%)	16(24.2%)	32(8.3%)
	第5回	8(4.2%)	5(11.1%)	4(7.3%)	10(16.4%)	24(19.7%)	19(42.3%)	70(13.4%)
	変化	+0.3%	+4.0%	+5.5%	+8.7%	+14.4%	+18.1%	+5.1%
合計	第1回	101(100%)	56(100%)	56(100%)	52(100%)	56(100%)	66(100%)	387
	第5回	192(100%)	45(100%)	55(100%)	61(100%)	122(100%)	45(100%)	520

「ア」系フィラーの次に多かったのは、ン系のフィラーであるが、リリーを除いた被験者のン系フィラー使用は1回目と5回目では減少してきている。特に、中国語を母国語とするルーシーにとってン系フィラーの使用は日本語の「うん」に音韻的にも意味的にも似た、中国語のフィラーの借用に当たるが、その使用は5回目には激減し、発話の聞きやすさに大きく貢献している。ルーシーの場合は、本人の希望により、インタビュー外に特に時間を設けて、発音その他について簡単なコメントを与えており、その際ン系フィラーの多用についても指摘されていた。そのため、本人が意識的にン系のフィラーの使用を避けるようにしていたと思われる。

まず第1回インタビューでは、「ン」・「ニー」等のン系フィラーが、ルーシーが使用したフィラーの種類全体の41% (27/66) を占めていた。さらに発話中の頻度としては、11発話単位に1回 (27/284) の割合で頻繁に使われていた。山根 (1997) のデータが示すように、日本語母語話者がフィラーとして「ン」或いは「ニー」を使用するのは極めて稀であるため、ルーシーの第1回インタビューの発話は、以下の発話例が示すようにかなり不自然で聞きにくかった。

(5) ルーシーの第1回インタビュー発話例 (冒頭部)

この1週間、あ、そう、んー、はじめ、んー、函館にき、初めて来た時、んー、ホストファミリーの、んー、はな、はな、話は、んー、たぶん分かりません。たとえばホストファミリーの妹は2人です。そ、あーん、その2人の会話は全然分かりません。でも、今だんだん、だんだん分かります。うん、うれしい。でも、わかった、分かることは、んー、簡単、んー、あん、簡単、でも、返事することは難しい。ん。

しかし4週間後の第5回インタビュー時には、ン系フィラーの使用数が減少した上に発話量も増加したため、ルーシーのフィラーの相対使用数は激減している。まず、第1回インタビューでン系フィラーの使用数がフィラー全体の41% (27/66) を占めていたのが、第5回では16% (7/45) に減少、発話単位に対する頻度も、11発話単位に1回から、37.9発話単位に1回 (7/265) にまで減少している。

(6) ルーシーの第5回インタビュー発話例 (冒頭部)

はい。先週の、日曜日に青森へ行きました。ん。青森の、ねぶた、というま

つりを見ました。その祭りは、大きい人形の中で、電気をつけて、何だっけ、パレードがありま、ありました。その、人形は、の大きさは、ちょっと、わたしはちょっと、びっくりした。本当に大きかったです。

反復系のフィラーは、母語からの借用とも言え、後半になるとかなり頻繁にフィラーとして使われるようになったことは特記に値する。例えば、反復系のフィラーは、第1回の総数ではフィラー全体の 8.3% であったが、第5回には 13.4% に増加している。気乗りのしない意等を表す、文末の下降イントネーションの言い淀みの「ですがー」、「けれどー」等を授業で教えることはあっても、次の言葉を探す間の時間稼ぎの為に、直前の語を繰り返して言ったり、その最終母音を伸ばしたりすることは、「台本式に」書かれた会話が中心となっている教室授業では、練習はおろか、意識化させることも皆無と言ってよいのではないのだろうか。しかし、このようなストラテジーは英語等でも使われるため、日本に住んで母語話者の発話の中で繰り返して聞くうちに、自然に真似できるようになるものなのかもしれない。音韻または機能的に母語から借用できるものの方が、習得しやすいということであろう。

文と文の間を繋ぐ（埋める）ものという広い意味で、本稿では接続詞もフィラーとして扱った。総数でも第1回では 11.4%、第5回では 14.2% と増加している。

さて、日本語の代表的フィラーと言えば、やはり「えーっ」「えーっ（と）」が一番に上がるであろう。「えーっと」というフィラーは HIF の授業でも導入され、教室正面に人が「えーっと」と言っている絵を掲示し、学生に注意を促している。しかし、エ系のフィラーは英語・中国語には存在しないため、これらを母語とする学習者にとってその習得は難しいようである。殆どの被験者は、第1回、第5回のインタビュー双方において、エ系フィラーを全く使用していない。興味深いのは、エ系フィラーが極く稀ではあるが使用したのが、上に、化石化の傾向を指摘されたブレンダとリックのみであったことである。このように、エ系フィラーがマスターしにくいものであるならば、なおさら、初級段階からその使用を徹底させる必要があるだろう。

日本語のもう1つの代表的フィラーは、マ系の「まあ」であろう。エ系と同様に、マ系フィラーは英語には無く、これも習得がしにくいものの1つであろう。牧野（私信）は ACTFL OPI の上級以上の発話の特徴として「まあ」の使用を挙げている。

本稿の被験者はまだそのレベルに達しておらず、「まあ」の使用もフィーによる、ただ1回のみである。「えーっ」に比べ、「まあ」の使用条件は特に限られており、その点をよく理解させた上で使用を促すことが重要である。

6. まとめと今後の課題

本稿では、日本でのサマープログラム参加者の日本語運用能力が、日本滞在及びホームステイの経験を通して、集中コースの中心にあたる4週間にどのような変化をとげるかを、フィラーを中心に考察した。前述のように、フィラーを取り扱う教材はまだ皆無に近い。「あいづち」という、鍛冶屋の槌打ちに語源を発する古い言葉があるものとは違い、「フィラー」というカタカナ語でしか総括的に言い表せないことが、この言語行動に対する一般的な意識の低さを物語っているのかも知れない。

コーリヤ佐貫 (1998) で指摘したように、日本語学習者数の増加に伴い学習者のレベルが全体として向上した現在では、簡単な所謂「旅行者会話」ではなく実社会で使い物になる上級レベル以上の日本語の習得を目指す学習者が多い。しかしこのような現状にもかかわらず、現在の日本語教育においても未だに、パターン・ドリル中心の暗記ものやスピード感のある返答、即ち瞬発力の養成が重視されている。初級レベルが主対象であった過去の日本語教育では、従来2人以上の *interaction* が行われる「会話」を口頭能力とみなしてきた。しかし、学習者を上級レベルへと導いていくためには、会話の延長ではなく、「口頭運用能力 と会話能力とは同等ではない」ことを再認識し、段落、さらには複段落単位で話を進めることのできる一人話能力を育成することが必須である。その為には従来のように単なる会話練習を行なうのみでなく、初級段階から既に、簡単な描写や説明をするタスクを与えることが必要である。そうすることによりフィラーや接続詞等の使用を促し、一人話技能の育成を計ることが可能となる。このことを念頭に、「口頭運用能力向上」の為の教材及び指導方法を生みだしていくことがこれからの日本語教育の課題であろう。

注

1. 本稿は 1997 年度日本語教育学会秋季大会で発表した原稿に新しいデータを加え、大幅に改稿したものである。加筆修正に当たってウィスコンシン大学マディソン校名誉教授三浦昭先生及びプリンストン大学牧野成一先生に貴重な御助言を頂いた。

2. 先行研究において「無意味語」(山下 1990)、「言いよどみ」(小出 1983)等の用語が使われてはいるが、本研究では、「フィラー」をこれら及びその他の関連した発話行為を含む総括的なものとしてとらえた。また接続詞も、文と文のつながりを助ける、特殊なフィラーであるという見方をする。
3. 例えば、初級教科書『なかま』や『なめらか日本語会話』には「あいづち」のセクションがあるし、『日本語ジャーナル』(1996年3月号 アルク)は「上手なあいづち」という特集を組んでいる。『講義を聞く技術』はフィラーの練習問題のセクションがある稀な教科書例である。
4. この主要4レベルは、超級を除いて各々さらに「-上」、「-中」、「-下」という下位レベルに分類される。これらのレベル分けは、大学や語学学校等で用いられる、1年生は初級、2年生は中級というような便宜的な区分とは全く関係が無い。ACTFL-OPIの手順や判定尺度、評価基準については、「ACTFL-OPI 試験官養成用マニュアル」あるいは *ACTFL Oral Proficiency Interview Tester Training Manual* を参照されたい。
5. 「話し言葉における段落とは何か」ということについては、「話し言葉における単位は何か」という未解決の問題と同様に今後の研究に委ねられる。ここでは「段落レベルの発話」を「一人の話者が一つの話題について、単文や複文の羅列連文ではなく、接続詞やフィラー及び種々の談話技法を用いることにより、滑らかにある程度の時間続けて話すこと」と仮に定義しておく。日本語の話し言葉における単位については、Maynard (1989) や Iwasaki (1993) を参照されたい。
6. この場を借りて、本研究に協力してくれた6人の学生諸君にお礼を申し上げる。
7. 『講義を聞く技術』(p. 4)による。
8. 山根 (1997) は「あの」を「話し手中心型フィラー」として分類しているが、「あの」が道で見知らぬ人に話しかけたりする時の話しかけ言葉 (attention getter) の代表例であり、また牧野 (私信) が指摘するように、日本語母語話者が「あの」を一人言で使用することはないことを考え合わせると、その分類は不適當であると思われる。

参考文献

- 鎌田修 (1990) 「Proficiency のための日本語教育—アメリカにおける「上級」の指導」『日本語教育』71号 pp.44-55.
- 小出慶一 (1983) 「言いよどみ」『話しことばの表現』水谷修編 筑摩書房
- コーリヤ佐貫・葉子 (1998) 「上級日本語の一側面：『一人話』の指導」*Journal CALJE*, 126-135.
- 産能短期大学日本語教育研究室編 (1988) 『講義を聞く技術』凡人社
- 富坂容子 (1997) 「なめらか日本語会話」アルク
- 牧野成一 (1991) 「ACTFL の外国語能力基準およびそれに基づく会話能力テストの理念と問題」『世界の日本語教育』1号 pp.15-32.
- 牧野成一 (1995) 『ACTFL-OPI 試験官養成用マニュアル (日本語版)』アルク

- 牧野成一(1996)「ホームステイにおける日本語学習効果」『日本語教育・異文化間コミュニケーション—教室・ホームステイ・地域を結ぶもの—』鎌田他編 凡人社 pp.41-59.
- 山下暁美 (1990)「話し言葉におけるいわゆる“無意味語”」『講座日本語教育』第25分冊 早稲田大学日本語研究教育センター
- 山根智恵 (1997)「話しことばにおけるフィラー：留守番電話の談話と電話の会話の資料をもとに」『日本語教育学会春季大会予稿集』pp.33-38.
- 橋本進吉 (1948)「新文典別記」『橋本進吉博士著作集』第1冊 岩波書店
- ACTFL. (1999) *ACTFL Oral Proficiency Interview Tester Training Manual*. Yonkers, NY: ACTFL.
- Iwasaki, Shoichi. (1993) 'The Structure of the intonation unit in Japanese.' in Choi, Soanja (ed.) *Japanese/Korean Linguistics, v.3*, Stanford California Published for the Stanford Linguistics Association by the center for the study of language and information, Stanford Univ.
- Makino, Seiichi, Yukiko Abe Hatasa & Kazumi Hatasa. (1998) *NAKAMA I*. Boston, MA: Houghton Mifflin Company.
- Maynard, S. K. (1989) *Japanese conversation*. Norwood, NJ: Ablex.

Eメール：
コーリヤ佐貫・葉子 (yoko.collier@uaf.edu)
額額憲子 (Noriko.Hanabusa.1@nd.edu)